View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

神宮文庫所蔵本『月の行衛』（上巻）の翻刻

雲岡　梓

本稿は、荒木田麗女（一七三二～一八〇六）の歴史物語『月の行衛』の、神宮文庫所蔵本の翻刻である。『月の行衛』は明和八年（一七七一）、麗女が四十歳の時に執筆された。百歳を越える老人から聞いた話を書き記すという鏡物に倣った仮託的構想をとり、高倉天皇・安徳天皇二代の事跡を記述するものである。『今鏡』と『増鏡』の間の歴史物語の空白期間を補う目的で執筆された。

なお、書名の表記には『月の行方』、『月のゆくへ』、『月の行衛』の三通りがあり、統一を見ていないが、本稿では底本の表記に従って『月の行衛』とした。

国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」の記載によると、『月の行衛』には盛岡市中央公民館本（二種）・東洋文庫岩崎文庫本・大洲市立図書館矢野玄道文庫本・東京大学本・京都府立総合資料館本・神宮文庫本（二種）が存在する。神宮文庫本には、文化七年尚女筆写本と、文化十一年秦光基筆写本があるが、この度翻刻するものは、特殊本に指定される尚女筆写本である。尚女は麗女の甥、荒木田興正（釜谷数馬）の妻。尚女が麗女から『月の行衛』を借り出したことは、本居宣長記念館所蔵の「荒木田麗女消息」（釜谷数馬宛）に記されている。

『月の行衛』はすでに近藤瓶城編『史籍集覧』第五九冊（近藤活版所、一八八四年）、池辺義象編『校註国文叢書』第一二冊『蜻蛉日記・更科日記・濱松中納言物語・

とりかへばや物語・方丈記・月のゆくへ』（博文館、一九一四年）、古谷知新編『女流文学全集』第二巻（文芸書院、一九一九年）、『校註日本文学大系』第一三巻『月のゆくへ・池の藻屑・豊鑑・義経記』（国民図書、一九二六年）に翻刻が収載される。しかしこれらには底本や書誌が記されず、複数存在する『月の行衛』のどの写本に拠っているのか定かではない。

そこで、麗女が執筆した『月の行衛』の原本に最も近い、神宮文庫所蔵の尚女筆写本をここに翻刻する。本書は麗女の死から四年後の文化七年に書写が完了し、興正の手によって神宮文庫に奉納された。また、野村公台の序の部分は麗女の養子の佳包の筆である。麗女の手になる原本の所在が不明である現在、最も信頼性の高い写本である。

【書誌】

底本　神宮文庫所蔵本（請求記号：五門―七六一）

外題　「月の行衛　上（中）（下）」

内題　なし。

丁数　上巻三十四丁、中巻四十八丁、五十五丁。

行数　一面十行。

成立　明和八年（一七七一）成立、文化七年（一八一〇）写。

序跋　野村公台序。

【凡例】

一、漢字の旧字体や略字、異体字は、原則として現行の字体に改めた。

一、底本の仮名遣はそのまま残した。

一、本文には、読み易くするために適宜句読点を補った。

一、本文には、必要に応じて濁点を付した。

一、反復記号「ゝ」「〳〵」は底本のままとしたが、「〻」は「々」に改めた。また、反復記号にも必要に応じて濁点を付した。

一、底本の漢字に付されている振り仮名はそのまま残

した。振り仮名の仮名づかいは底本のままであるが、適宜濁点を付した。

荒木田氏月行衛序

国史亡而稗官作稗官降而野史出。夫稗官小説之書、方言俗語従細遺大務摸情事動渉淫褻不可以訓也。然宮壺之隠秘君相之忌諱、往々散見其書者実為不少而中古之風俗歴世之盛衰亦可縁焉以考一二矣今夫諸鏡諸語之属其所記載鮮有関係大体然亦或可以補史之闕文矣故雖文献不足猶足徴焉者於是乎存雖欲勿取、君子其舎、諸則稽古論世者不可以不読也。至如野史則杜撰、無稽其濫已甚、冗套一轍愈下愈鄙、奚足観哉。清渚素有彤管之才。博覧国籍莫不渉獵善和歌通方語尤多撰著。頃者其良人如松繕写清渚所著月行衛者致諸余草堂乞弁一言於首簡余受読卒業嘆曰、古女流之善詠歌者世不乏其人至如有才学善著述者則若清紫赤染之徒其書雖以方語乎文藻之美、記載之博、不愧彼曹大家、蔡文姫矣。然自古訖今有幾人邪。今観清渚之業富贍殆過乎古人可不謂曠世之奇乎哉。其書始于仁安終于元暦記、高倉安徳二帝時事也。蓋諸鏡諸語、今世具存。而独二帝紀伝散逸不見清渚乃広考、家乗旁探野史刪其煩蕪省其冗長潤色以成斯書蓋亦足以裨助史学矣。非如他艶媚瑣細無益世教誨婬導奢徒為玩具者比也。清渚名麗荒木田氏、清渚其字。伊勢祝官正四位下武遇女。如松名雅。姓慶徳氏系於慶滋姓、蓋太史保胤之裔也。亦好学博覧平居以翰墨為娯。夫妻相共読書討論問難上下千載往歳相携西遊於五幾間迂道湖中顧問草堂余乃得与相識云時已有弁言之託。余雖不敢当乎、心竊既許之爾来数歳、書問往復情誼益厚。慶得寓目清渚之業。嗟余素暗史学不諳国籍、則又何以能賛一辞邪。雖然以夙心之不可負也、姑陳所聞。為序如此。亦唯聊酬我志耳豈曰為重清渚之業云爾乎哉。月行衛。方語也。義具其書中。

安永己亥秋九月淡海野公台撰

慶徳佳包書

佳 包

よしあしをわくとしはなき身にも、なにはのことしげき世をうんじて、市の中の住ゐはいとむつかしうおもひけるまゝに、しばしさとはなれたるかたにあらまほしく、きさらぎの比より静なるすまひもとめて、あからさまにうつろひ侍り。所は山かたかけておかしやかなるに、前行河のゆをびかならぬ水の音、後の山の長閑にもあらぬ松風の声などはあれど、みねの霞、たにの鶯の色音はしも、朝夕心をなぐさむるつまとなれるに、はた山ふかくすむ梟のたぐひまで浮世の事きかぬなむ、又なくうれしかりき。まして錦織なす花の盛りは都人だに山路ゆかしうすめるをと、今行末の春のけしきの見すてがたく、いみじう心のとまりぬれば、故郷に帰らんこゝちもせず。住よしの里めきて、おもひのほかに長ゐもせらるれど、忘れ草生る岸だにこゝろやすしや。其わたりの山賤さへおのづから面なれて、いつとなくむつまじうなりにたるに、また芦垣のあなたにすまふ人は軒端のまつによはひくらぶるばかりの翁なるに、とき〴〵とぶらひ来てとはず語りに古き世の事くづし出ぬるを聞には、浦嶋の子に

やと打驚かるゝ折もあれど、こよなう耳とむるふしうちまぜなどすれば、いとめづらかにて、かゝる鄙のすまひする人としもおぼへず、よしづきたるもむかし床しうおもひて、けしきとりなどすれど、さらに我身のうへは語り聞ゆる事もなきを、いとあやしとおもひわたりけるに、しめやかに降くらす雨の中、れいのさしのぞきたり。物さびしき程なれば、折うれしくてむかえ入れつゝ、まめやかにあへしらひ聞ゆるにぞ、打とけて又おなじことかたり出ぬべきけはひなり。今日はこなたもとはまほしくする事のあれば、一杯の濁れる酒などすゝむるに、いといたくよろこびつゝ、心地よげに笑まけて、あたひなき宝にもまされりとけうじつるもおかしきに、さかづきをさし置つゝ、「あはれ都人なりせば、かやうならむとき、おりに逢たる物ずしなどもつかふまつるべきに、田舎にとしへぬる身こそ無下に口おしう侍れ」といふさまもいみじう人めかしげなりと、めざましうおぼゆるを、さりげなくもてなして、「さは若き比は都にや上り給ひし。あなたの事もしり給へるにこそ」といへ

ば、打うなづきて、誠には都にて生れ侍り。親なる者は百敷の御垣にまぢかく仕ふまつりしとのもりに侍り。相つゞゐて兄にてさぶらふ者もおなじ事京に宮仕つかふまつれり。おのれはすくせの口おしきにや、都の住ゐの何となう物うげに覚へ侍りしかば、かゝる山隠れに、浮世を遠くてすみ侍る也。此日比もおのれが身の物がたりの聞へまほしう思ひ侍りつれど、さらに誠とも聞せ給ふまじきにつゝまれて過侍りしを、けふなん事のつゐでに申さぶらはん。そのかみ今鏡と申し者は武蔵野の草の露ばかりかこつべきゆへ侍りしが、その一本のゆへにや、あやしう世の人に似ぬ命長さにて、親なども幾代の君にかつかへ奉りし。失にし時も更にいくつなど、かぞへやるべうも侍らざりき。おのれも百年はいととう過侍りし」と聞えたる、いみじう怪しともいえばおろかなり。中々おそろしうさへおもひて、そゞろさむきまでなれば、いらへんかたもしられぬを、とかうおもひしづめて、「いとも〳〵めづらしう、うけ給はる事の又たぐひあるべうもなく、さらにうつゝ共覚え侍らず。さやうの人こそいにしへより遠きよのこともおぼつか〔ママ：「な」脱〕からず見しり給えるなれば、すこしづゝ語り給ひなんや。みづからはか〴〵しからねど、上りての世ゆかしうおもふ心ふかく侍りて、はかなき書などにかき置たるはおほからねど、見あつめ侍るに、此のたまふ今鏡とか聞え置給ひしをしるしたるなん、続世継とて今のよにもてはやし侍る。そのつゞきにいや世継といふなる書はありと聞侍れば、見まほしくて年比もとめわたりつれど、世にあまたもなきにや、今にえ見侍らず。かへりて其さしつぎなる増鏡は、はやう見侍りしに、中なる一種を闕ぬるなん、常に本意なくくちおしうおもひ給ふるを、さらば其代の事しり給へる事ありぬべければ、かゝるおりかたはしばかりだに語り給ひなんや。さらばいとうれしうこそ侍らめ」といえば、翁うち笑ひて、「世継のおきなのつらにおぼされんはいとかたはらいたき事に侍り。古へざまの事も、下が下に有つる事こそ親などもたちまじり侍れば、おのづから聞置ふしもさぶらふを、天つ君のおほんよ、星の位などの御事は、いかでかはしり侍らん」とつれなげにい

ひたるも、いと口おしくて、「いざや、代々を重ねたるほどにもあらず。高倉院の御位のはじめとては、続世継に見え侍り、又後鳥羽院の御代の事は増鏡なんあきらかにてらせり。唯安徳天皇のしろしめしつる御代、平氏の時めきぬるわたりの事、いくばくならぬ年月なれど、其程ばかりおぼつかなくて過なんがいふかひなくおぼへ侍れば、わりなくもきこえつるなり。さらに〳〵浅はかなることにはあらず。日比もいや世継の草紙の見まくほしさのせん方なきまゝに、いにしえの跡を追て、等身の仏をだに造りて祈り奉りやせんとおもひ侍りしに、うれしうも逢がたき人にあひぬる事よ。さらに其書えつるよりもこよなう覚え侍るものを、いぶせうも忍びこめ給へるなむ、聞えさせん方なくこそ」と、まめやかにえんずるにぞ、翁もさすがに哀れとおもへるにや、「さばかり御心に入れ給へる事のすぢなれば、すまひ侍らんも心なきやうなり。さらばしりたらんかぎりは、くだ〳〵しくともつゞけ侍らん。さはいへど、御垣のうちの御ことは、いとおぼ〳〵しう侍れば、其世にありけん戦ひのやうなどむくつけくとも申てん。そもひがごとおほくや侍らん」と、あやうげなるさまながら、かつ〳〵語り出たる、いとめづらかにて、ありし雨夜の物がたりめきたり。

月の行衛巻の一の上

高倉院

八十代の帝は御諱憲仁と申奉り、後白河院第三のみこにおはします。御母建春門院は平の滋子とて、贈左大臣時信の御女にいますかし。仁安三年二月、先帝おりさせ給ひしかば、同じ三月御位に即せ給ふ。まだいとけなくおはしませば、基房の大臣摂政し給ふとはいえど、世の政は猶一院ぞよろづ掟させ給ふ。今年建春門院は后に立せ給ひ、父の時信の君にも左大臣贈らせ給ふ。后はまた次の年、院号えさせ給ひて、女院など申もあらまほしう、上のかくゆるぎなくさだまらせ給えるも、有がたき御幸ひにぞ侍る。此一つ流れなる平の清盛とて、其はじめは柏原の帝の御後なる葛原の末葉とか聞ゆれど、世かはり

時うつりぬれば、ひたすら弓箭の家となりて、祖父などは受領ばかりなりしに、父忠盛のときにぞ鳥羽院の御おぼえありて殿上をもゆるされ、雲の上に思ひのぼり、刑部卿など聞えし。此清盛は若くて人数にしもあらぬさまなれど、弓箭の道かしこく、保元の乱れの比ほひ、内の御方人にてかひ〳〵しうつかふまつりしより、君も頼もしき者に思しめされしに、其後信頼の右衛門督のさはがれの折も、まめなる心見え奉りしかばなん、いよ〳〵御きそくにかなひて、はじめは安芸守などいひしも、いやましになりのぼりつゝ、平治には参議にて、三つの階をさへ越たり。猶あらまほしう、年々によろこび加へて、おとゝしより内の大臣と申さへ目もあやなりしに、去年の二月には太政大臣の宣旨あり。輦ゆるされて参りまかでもいとやむごとなく、いつしか世をも心にまかせてまつりごちけり。類ひろく、子ども、男女あまたもたるに、みなかたほなるなく、とり〳〵にめでたくて、男はかうぶりし、女はさるべき上達部などむことり聞えて、思ふやうにかしづきたり。すべて此一ぞうのみいみじう栄えて、賜れる国もあまた侍りとなん。北の方は女院の御はらからはなりければ、よせさへおもくて、世の人もやむごとなく思ひたり。せうとの時忠も、後には大納言などにて、いと時の人にいましき。清盛の大臣はいとゝく太政大臣はかへし奉り、病にことつけて、かしらをさへおろし給ふれど、よをしる事はおなじさまにて、六波羅西八条などに家居びゝしくしておはすればなん、六波羅の入道大臣など人は申侍り。又津の国福原といふ所にも通ひて住給えりとよ。今のおほきおとゞにては、花山院忠雅のおとゞおはしまし、左の大臣も同じ藤原なる経宗なり。兼実は左大臣とぞ申し。久我の大納言も此比内大臣になり給える。何れもやむごとなく代々その家にいましければ、春日の藤のしなひもながく栄ふる春にあひ、源の清きながれの末ひろごりて、数そふ星の位の光りも曇りなき御代とて、帝のきびわにおはしますほども、よの中うしろめたからず、上りての世にも恥ぬさまなり。年の内に御儀式など行はるべしとて、所々まだしきより、さりぬべき御まうけ仕ふまつれり。十月廿一

日、豊の御祓とて河原に出させおはします。其日の御ありさまは、さき〳〵もおなじことなれど、思ひなしのことにめでたくて、物見車などはさらにもいはず、所々の御さじきさへ今めかしう見渡されつるに、あやしき田舎の民どもまで所せうつどひて拝み奉る。摂政殿はすこし後れてつかふまつらせ給へる。御供の人々、今日をはれとよそほしう調へられつるさうぞくの、目もかゞやくばかりなるに、容さへとり〳〵にあざやかなり。十一月廿二日、大嘗会とぞ聞え侍る。御屏風は朝方、伊経の君かき給えり。悠紀方の歌は、永範の宮内卿つかふまつり給ふ。近江国鏡山、

天地をてらす鏡の山なれば
久しかるべき影ぞ見えける

神遊の歌、守山

皇を八百万代の神もみな
常盤に守る山の名ぞこれ

此御事は、嘉応のやうにしるされし書もありとうけ給はれば、何れがいづれにや。老ぬる身の口おしさは、たしかにも覚え侍らずなん。かやうのいそぎに、何となく年も暮て、立帰りたる春の気色は空の色よりはじめ、鳥の声、草木の緑り、すべてはへ〳〵しうめづらしき心地して、都にのみとは思ふべきならねど、取わけ内わたりは御節会何くれの御儀式のいとめでたきに、紫の袖をつらねて参り給ふ君達の御さまはしも、是やうれしきといふばかりなり。近き御代にはむかしざまにはかはりて、上も大内にはおはしまさず、さりぬべき御節会などの折ごとに行幸せさせ給ひ、常は大方閑院殿を内裏にておはしませば、始にはまづ大内に渡らせ給ひ、十三日にぞ閑院に還らせ給ふ。院の御前はいとゞしう御心ゆきて、かひある春の光を待出させ給える御さまなり。こゝらの皇子達の中に、今の上をばすぐれてかなしう奉らせ給ひし御事なれば、坊と聞えさせしよりいつしかと待渡らせ給えりしも、かくゆるぎなくて見奉らせ給ふればなむ、今は思し召事なく、御心やすくて、御幸もしげうせさせ給ひ、あらまほしくて過させ給ふ。夏の比は御ぐしおろさせ給えり。古へより仏の道に御心ざしふかくおはしまし

て、功徳のかたによらせ給へれば、御幸もさやうの方にて、高野熊野などにものせさせ給ふ。まだ御年などもさのみねびさせ給ふにはあらず、四十におほうはあまらせ給はず。御さかりの程をもやつさせ給へる、いとありがたくめでたき御有さまにて、法皇などぞ申奉れる。今年卯月には、年の名も仁安はとゞめられて、嘉応のはじめと聞ゆるも、よの中かはりたるしるしにや、内にも石清水、加茂などに行幸ありて、さま〴〵に今めかしく、琴笛の音も絶間なく、地下の楽人どものあなたこなたいそがしく参りかよへる顔つきさへほこらしげなり。かゝれど先帝は無下に稚くおはしませば、御幸などもせさせ給はず、何のおかしきふしもなく、明し暮させ給ふるにぞ、人々もいつもくづしいたげに、物はなやかなる事もなく、いとおしげなる御けはひなり。此比の伊勢の斎にては、一院の姫宮おはします。加茂にも同じ事、院の姫宮ゐさせ給ひけるが、御なやみによりて秋の比下させ給えり。此斎院は先帝の御時も替らせ給はず、平治のはじめより今までなむおはしましける。式子内親王とて、歌の道にふかう御心入れさせ給ひ、物の折ごとによませ給える御歌も、ことにすぐれてめでたきよし、世にも聞え侍り。加茂をまかでさせ給ひて、唐崎の御祓はてつるまたのひ、双林寺の姫宮とて、一院の御兄弟と聞へさするみこの御せうそこありて、昨日のこと申させ給へる御かへりに、前齋院

みたらしや影たえはつる心地して
志賀の波路に袖ぬれ(ママ)こし

准后宣旨もかうぶらせ給ひ、かやの齋院とも人は申侍り。此後の事にや、定家の君忍びて参り給ふなりと世の中に打さゞめきけるを、父の俊成、皇后宮の大夫とて居給ひけるが、はやう聞付給ひ、此事世にひろくなりて院に物の聞えあらば、おもき御かうじこそあらめとわづらはしくて、いそぎいさめ聞えてんとおぼいて、定家の侍従の住給ふ方におはしけるに、かの宮の御文のあるをあけて見給へば、

玉の緒よ絶なばたへねながらへば
忍ぶることのよはりもぞする

とすさませ給へるやうなるを見給ふまゝに、いといとう驚かれ給ひ、かゝれば侍従の心をつくし給えるもことわりぞかしとて、何事も打出ず帰り給えりとなむ。此定家の君ぞ、又なき歌の聖にいまして、つぎ〳〵末の代まで家の風吹つたへたるもいみじう、父の俊成はたたぐひなき歌仙にいまそかりけりとは誰もしろしめしつる事なれば、今さらに聞えさすべくも侍らずかし。ある時俊成の卿述懐の歌を読（ママ）て定家の許に送り給ふとて、

さだめなき世にもわかきは頼みあり
とにもかくにも老の身ぞうき返し、定家
とにかくに老はあまたの年もへつ
定めなきよにわかき身ぞうき

此御代の比は男も女もすぐれたる歌人おふく、内渡りにてもさる方に興あることあまた侍りき。霜月末つかた、摂政殿内の女房達いざなひ給ひ、宇治におはして終日いとおもしろくあそび給ふ。歌も構ぜられしとぞ。清輔の君題出して、みづから河水久澄といふ事を、

年経たる宇治の橋守ことゝはん
幾世に成ぬ水のみなかみ

とて、初の五文字に心をくだき、久しう思ひわづらひ給ひしとあるは、此折の事にもや侍りけん。たしかにはえしり侍らず。こと人々の歌をも聞置侍らざりしこそ口おしけれ。師走の廿日余りは、なべて送り迎ふる年のいそぎに、大かたの世しめやかにもあらぬに、延暦寺の衆徒は公に訴へ申事ありとて、日吉の御輿ふりおろし奉りしかば、都の中はいとゞらうがはしきとよみなるを、内にも院にもおどろかせ給ふ。是は成親の権中納言のしるよしし給ふ所は、尾張の国なりける、其目代なる右衛門尉政友、なめきふるまひ仕ふまつれりとて、山法師どもとがめ出けるなり。やがて院にてことのさだめありて、右衛門尉を獄に下させ給ふべきよし仰言ありしかば、衆徒共心とけて、すなはち御輿もかへらせ給ふ。此さはぎに、成親の中納言つかさとけて、吉備の国に流され給ふと聞ゆるも浅ましきに、山の座主なる明雲僧正は、御侍僧とゞめられ給へりなど申ほどに、又時忠の中納言、頭の弁信範と二人、国々に流され給ふよしにて、其ゆかり

とある人々さへ引こもりて、成親の中納言はいく日もあらで、御かうじゆるされ給ひ、つかさ位もとのまゝにて、かはらず院にさぶらひ給ふべう仰言侍りとよ。山には法師原心ゆかず思ひけるにや、年帰りて睦月十日あまり、又都に参るなど聞ゆれば、院にもうしろめたう思し召れて、検非違使に仰言ありて、みだりがはしき事あらせじと掟させ給ふ。山法師はあながちに訴へ申つるほどに、院もすべなく思し召るゝにや、二月に又去年の冬流されし人々召返されて、成親の中納言かしこまりのよにてこもりゐ給へり。卯月には院の御前、奈良に御幸おはしまし、東大寺にて御戒うけさせ給ひ、千僧供養など尊きことせさせ給ひてかへらせ給ふほど、摂政殿宇治に御まうけうるはしうて待聞え給えり。げに河波のひまなく庭をあらふこゝちして、院も渚きよく御らんじつれば、立よらせ給へるを、あるじ方にもいみじうよろこび聞え給ひ、御おくり物にめでたき御念珠、御馬など奉り給ふ。院の上、去年高野に御幸をせさせ給ひし折は、おぐしおろさせ給はんの御心づかひちかう思し召れけるほどにて、ことに引つくろはせ給ひしにや、摂政殿車にて参らせたまひ、おほき大臣内のおとゞ、さらぬ上達部はみな馬にて、殿上人などは数もなう仕ふまつり給ひ、うるはしき冠のよそひ、あるは直衣にて綾錦をたちかさねたる装束は、なべてならぬ匂ひを尽し、とり〴〵によにな き色あひをとゝのへられつるは、来し方、行さきためしもありがたき御事なりとて、物見る人々浅ましきまでに思ひたりし。さて程もなく御さまかへさせ給ひてしかば、其後は御幸も所せからず、よろづ事そがせ給ひて、人おほくも具せさせ給はざりき。十月ばかり、住吉の社歌合とて、人々いどみかはしつるもおかしう、とり〴〵に文かき出給へる言の葉の露は玉の光りもなべてならんやは。後徳大寺の大臣、大納言と申し程にや。

古にける松物いはゞとひてまし
むかしもかくやすみの江の月

などよみ給ひしも此時の事になん。判者宮の大夫俊成にいましき。又同じ月十六日、女院法住寺殿にて歌合せさせ給ふ。判者は例の宮の大夫つかふまつり給える。人々

あまた参り給ひ、かたみにおとらじ、まけじとことさらに心づかひして、聞え出給える言の葉の色なれば、いづれか浅はかなるは侍らん。勝負のけぢめわきて、次第にあらそひもてゆく程いと今めかしう、人々の詞さへざえ〳〵しう、興あるさまに侍りしよ。関路の落葉といえる事を、実房の大納言、

清見がた関にとまらで行松は
あらしのさそふ木の葉なりけり

同じ心を、源頼政

都にはまだ青葉にてみしかども
紅葉散しく白河の関

とり〴〵に優なる事のみに侍れど、こまかにも聞置侍らず。其比院は法勝寺に御幸あり。摂政殿も参らせ給ふ。神無月も廿日あまりなれば、風に乱るゝ紅葉の色は紅の雨にやとみゆる。木のもとのえならぬ詠に、御前にもことに興ぜさせ給ひ、人々も春の木かげよりげに立ことやすからず思すめれど、暮ぬれば御心にもあらで還らせ給ふ。又此比よにあさましき事の侍りしよ。上の御元服の御さだめとて、摂政殿内に参らせ給ふ御よそひ、殊に引つくろはせ給ひ、御前共もきら〳〵しうて、黄昏もすぐるほどに出立給ふ。大炊の御門、猪の隈の渡りに、おもひかけずあやしの者どもこゝら待うけ奉りて、えもいはずむくつけきふるまひをしつゝ、御供なる人々をいたくなやまし聞えて、みだりがはしう追のゝしり、もとどりをさへ切たる物か。ゆくりもなき事にて、よういすべくもあらず、誰も〳〵あきれまどひたり。殿は唯おそろしきに物も覚え給はず、いみじきひたぶるごゝろある白波どもの立さはぐにこそはとおぼいて、いとはしたなく、むくつけうさへなり給ひ、御車のうちにひきふし給ふ。からうじて御前ども参りあつまりしかど、いひしらず見ぐるしき姿なれば、今夜はびんなしとてかへらせ給ふ。かう世づかぬ事は、盗人などのしわざにはあらず。六波羅の入道のはからう事とて、資盛の侍従の仕ふまつれるにや。是は七月の比、資盛の侍従物へまかりける道にて殿に行逢奉りしに、みしらぬさまにかしこまりもをかず打過るを、殿の御前どもなめげなりと咎め出て、侍従を

馬より引下し、いみじうのゝしりければ、からうじてにげていにけり。此じゝうは小松の重盛の次郎にて、六波羅の入道のむまごなり。いつしか此事かくれなく、入道も伝へ聞て、いとものしとおぼいたり。もとより心おさなくくね〳〵しき人なりければ、いかで其恥すゝぐばかりの事を物して思ひしらせ奉らむと、あながちにあたまへつゝ、起居心にかけ渡り給ひけるを、殿には露しらせ給ふべきならねば、たゞいかさまなるしれものにかとおぼされしに、かうなりけりとしりはて給ひては、今すこし思しよらぬ事にてめづらかにも浅ましうも、さま〴〵に御心もうごくべし。やう〳〵世の中にもあひなきことにいひ出ければ、小松の大納言聞給ひ、いはん方なふ浅ましくて、いとたい〴〵しき事なりとむつかりけるが、やがて資盛の侍従をば京にもあらせず、伊勢の方につかはしたり。此大納言はこゝろおきてひろく、あくまでよういふかく、思ひやりもことにものし給へば、入道の心のいちはやくわづらはしき事のみ、折にふれておほかるを、よろづにいさめ聞え給ふればなん、おほやけ私めやすきさまにてぞ過行ける。まこと花山院の大臣、六月ばかりより太政大臣退給ひしかば、冬の比、摂政殿ならせたまふ。あけん年は、上御冠の事有べしとて、さやうの御まうけとぞ聞えし。年帰りて、朔日の節は例の作法かはらず、大内にて聞し召す。三日に上御冠奉る。十一にならせ給へど、いみじうおとなびさせ給ひ、御容もまほにめでたう、御心ばへもなつかしうおはします。殿御引入つかふまつらせ給ひ、左のおとゞ御ぐしおさめ給ふ。十三日には朝覲の行幸あり。院も女院もめづらしう待見奉らせ給ひ、あげおとりだにせさせたまはず、いとゞしうなまめかしさそひて、あてにけだかき御さまを限りなう御らんじて、かつはゆゝしうさへ思し召れて御涙も忍びかねさせ給えり。御贈り物になう思しまうけられて、ことにめでたきさまなり。院につかふまつる人々は、ほど〳〵加階などして、よろこびあふめり。上は去年より大内におはしまし、閑院をば殿に返し奉らせ給ひける。十九日、そこにておほき大殿大饗行ひ給ふとて、殿原引つれて参りたまふ。是はたいつくしうはえ〴〵しきけは

ひなり。月の末には上こゝに渡らせ給ひ、又内裏になるとて、殿はことさらにみがきとゝのへて奉らせたまふ。今年は上のつゝしませ給ふ年とて、夏の比嘉応は止められて、承安元年にぞ改り侍る。十二月一日、弓場始なりける夕つかた、いかゞしけるにや、炬火（たてあかし）の火、宇津保柱にもへつきたり。人々まどふ程に、頼政の右京の大夫、従者などして、とみに打消させ給ひしかばなむ、上いみじう賞（ほめ）させたまひ、正四位の加階賜はせ、郎等なる源の與をも馬の允になさせ給へり。六波羅の入道はかしづき給ふ御女、内に奉らんとて、こゝらいそぎ給ひける。此比院の御子の御定めにて参り給ふ。いといかめしきひゞきにて、けはひことにめでたく、女房などもなのめなるなくえり調へられてあまたさぶらふ。其夜も御車所せう引つれ、よそほしうて、親族の殿原、御前つかふまつり給へり。さうじみは十五になり給ふ。やがて女御の宣旨あり。かひありて時めきたまふを、入道おとゞもうれしう思すべし。又の年、きさらぎには、女御、后に立せ給ひ、中宮とぞ申き。御つぼねは藤壺なり。いつしかとあらたまりたる御しつらひめでたくて、大床子立、火焼やなども御前にかきすへつるも、いとけだかく、御帳の前のしゝ、こま犬のけうときかほつきさへすさまじうも見えず。何事もはへ〴〵しきこゝちして、女房達のなり容はしも、いえばさらなり。色ゆるされたるは織物の唐衣、さらぬはひらぎぬなどのけぢめさやかなるも、さる方にいとおしき物から、さま〴〵におかしう見渡されたり。亮には宮の御せうとの重衡なり給ひ、権の亮には小松の大納言の太郎なる惟盛の少将とぞ聞え侍る。此比のよは、彼入道の一ぞうのみ時にあひ給へるに、后の御ゆかりにさへいましければ、此すぢの君達はいとゞしうはなやかになりまさりたまへり。打つゞき平氏の后に居させ給ふ事は、ためしもありがたく、又春日の神の御慮もいかゞと、よにはかたぶき申人も侍りしかど、何事も入道の心なる世とて、かくはさだまらせ給へるなめり。大臣達、上達部の中にも姫君もたまへるあまた侍れど、入道の心のわづらはしさに、思しつゝみて、此後女御奉り給ふ人もおはしまさず。中宮のみなん、ならぶ人なく御

心(ママ)すげにてさぶらひ給ふ。弥生には日吉に行幸あり。春の光も長閑におもしろかるべき折なれば、君達われも〳〵と仕ふまつり給ふ。さま〴〵御装束は花の錦に色をあらそひて、いとはへ〴〵しう、いみじき見物なりとて、女車なども所せう立つどひて、こぼれ出たる袖口どものなべてならぬも多かりければ、わかき殿原いたう心つかひせられ給ふ。陪従などもことに調へさせ給えり。終日あそびの、しりて、暮ぬればかへらせたまふ。摂政殿は又初瀬に詣給ふ。是はたいかめしき世のひゞきなり。寛治の古きためしとて、上達部殿上人あまたさぶらひ給ひ、おの〳〵花を折尽したるよそひども、心ことに引つくろひ給へり。又、いとめづらしう侍りし事は、宝荘厳院にて尚歯会とか、頼政、敦頼など六十、七十にあまりたる七の翁あつまりて、歌よみ遊びし侍るなり。清輔の催し行ひ給ふことにて、其身も七人の数に入給ひにし。垣下にも歌人達おほくて、さま〴〵にめでたき日のあそびとて、末の世まで語伝へ侍りしよ。誠斎宮はさきの御代のはかはらせ給ひ、今の上の御位のはじめ、御卜にあはせ給ひしは、前斎宮の御兄弟にて一院の姫宮におはしまし、嘉応のはじめ諸司に入せたまひ、秋の比野の宮にうつろはせ給ひて、次の年伊賀に下らせ給へりしに、今年五月御病ありてかくれさせ給へるよし、都にきこえあげたり。寮つかさにてはかたじけなしとて、かねて頭なる忠重が家にまかでさせ奉りしとよ。内にも聞し召、驚かせ給ふ。院にもあたらしう思し歎きたり。十六にぞならせ給へる。御母は皇太后宮とて、大炊の御門の大臣の御女におはしまし、実定の大納言の御兄弟ぞかし。斎宮かゝる事のあるには、廃朝とてしばしは朝政も止めらるゝ事となむうけ給はり侍る。賀茂にも式子内親王の御かはりには二条の院の姫宮、先帝の御妹なりけるみこなん居させ給ひしかど、こなたも去年御なやみにてまかでさせ給ひ、其後は御定めも侍らざりき。水無月のはじめ、伊せには公卿の勅使立させたまひ、内外の神に斎宮の御事を申させ給えり。殿も今は摂政退せ給ひ、関白とぞ申めり。神無月には祇園稲荷などに行幸せさせたまひ、又次の年卯月ばかり、石清水、加茂へ行幸侍り、

女院年比の御願にて最勝光院供養せさせ給ふ。十月にと思し召れて、法服何くれといそがせ給ひけるに、行幸さへあるべう聞せ給へば、いとおもだゝしう思し召れて、ことに御心つかひせられ給ふ。内よりも御捧物所せきさまなり。御導師は興福寺の覚珍僧正まいりたまひ、いみじう尊き事の限りに侍り。御斎会になづらへて、賞ども行はる。其日の事は中宮の御せうとの宗盛の中納言うけ給はりてつかふまつり給ひしかばなむ、やがて此賞とて二の階のぼり給えり。六波羅の入道は津の国輪田の御崎のわたりにあらたに嶋をつきこめん事を思ひ立て、日比心を尽し、人々に仰せていそぎたまひき。やう〳〵ことなりぬるやうなれど、汐の満干ものどけからぬ荒海につゞきたる所とて、ともすれば打よする波風にとられて事ゆかず。いたづらに日数ふるを、入道もしわびて、海にます神のたゝりもおそろしう、あらぶる神の御慮をなごむばかり祭祓などをものし給ひ、又石のおもてに一切経をかゝせて水底にしづめ給えり。さて後つゐにことなりつればなん、時の人経の嶋とぞ申き。そこにて阿弥陀供養法行ひ給ふ。入道のさたにて千壇など、いかめしき法の会なり。法親王達をはじめ奉り、何くれの僧正僧都など、所々よりつどひ参り給ひ、いとたうとくて、院の上さへ御幸せさせ給へり。今は秋津嶋の波おさまり、豊芦原の風静にて、相坂の関守も心ゆるびし、二万の里人の貢物もおこたらず、国民ゆたかなる時とて、君も臣も思ふ事なく仏の道にさへ心よせて過すなるが有がたく、聖の御代ばかりなる君のひかりのあまねさを、下が下なる賤山がつまで例なうおもひ奉れば、都も鄙も心のどかにてあるに、流れ行年波のみなん、いとあはたゞしうて今年も立ぬ。立帰りたる空の、一夜にあらたまりぬる程もしるく、都の山も今朝は霞て、日の光りのうらゝかさは、宮もわらやもへだてなけれど、九重の御垣の内は又ことなり。御かた〴〵の御よそひよりはじめ、すべてめでたう、豊の明のいまめかしう、庭の砂は猶残れる雪の色も寒からず、外の衛もり衛士の焼火のけぶりさへ、まだき霞に立そひたるこゝちして、竹の台に通える風は、鶯よりさきに万代の春を告そめたり。上はいつしかと中

宮の御方に渡らせ給ふ。御引直しの御姿かぎりなうめでたきに、宮はた御物の具うるはしうて、さしならばせ給へるは柳の枝にさかせたる御さまなるを、ちかうさぶらふ人々目もあやに見奉れり。そが中に右京の大夫といえる女房、ひとりごとに、

雲の上にかゝる月日の光りみる
身の契りさへうれしとぞ思ふ

宮にはやむごとなき人々もあまた参りあつまりつれど、とりわけ此右京の大夫の君はすぐれて心にくきものに、殿原もさだめ給ふ。みやもかひ〴〵しうむつまじき方にて、人よりことに召まつはさせ給へり。上はやがて一院、女院へ朝覲の行幸せさせ給ふ。いとゞしうねび増らせ給へる御さまかたちを、院の御前たち尽せずいたはしう見奉らせ給ふ。女院は時々内に参らせたまひけるが、中宮ももとよりはなれさせ給はぬ御あはひにて、常にもうとからず聞えかはさせ給ひ、折々は御対面なども侍り。此程女院、内にさぶらはせ給ふとて、宮の御方にも入らせ給えり。宮の御母なる八条の二位殿もおはします。とり〴〵にめでたき御さまどもにて、女院紫の匂ひの御衣、山吹の御うはぎ、又色(ママ)の御からぎぬに蝶を色々に織たりしを奉れり。宮はつぼめる色の紅梅の御ぞ、かば桜の御うはぎ、柳の御小袿、赤いろの御唐衣、桜を織たるなど、いとゞ御匂ひおほく見えさせ給ふ。二位殿もうるはしき御よそひに、け色ばかり御裳引かけておはします。こなたかなたの女房、色々の錦をたちかさねたるさうぞくの、何れとなくきよらにて、さらに同じきもなく、色も匂ひもなべてならず好み調へつるは、吉野の春、立田の秋も、おなじ時に見るこゝちするばかりなり。御心のどかに御物語聞えかはさせ給ひ、いたくふけてぞ、女院かへらせたまふ。この御前は、いにしへの宮のうちにも恥ぬばかり、容心ばへある若人のつどひてさぶらふとて、若き君達は物いひ所にし給ひ、常に立なれ給へり。月の夜などは、宮のすけ権の亮など参りて、遊び明し給ふ事も絶ずなん、今は上もおとなびさせ給へば、除目も御前にて行はるとて、殿ばら夜る〳〵参り給ふ。上わかうおはしませど、御心ばへめでたく、道々の

ざえかしこく物せさせ給ひ、文のかたをも、ことにこのましうせさせ給へば、君達もこゝろばみ給へるおほく、古き博士ども、時にあひつゝ、おほやけわたくし、優なる遊びしげく、花鳥の色音もはへあるころほひになん侍る。弥生一日、親宗の右少弁の家にて、詩合あり。れいのこまとりにかたわけて左右かちまけをいどみたるほど、興あるさまに侍りしとよ。卯月には勧学院にて、藤の花の宴あり。君達博士共つどひて文講ぜらる。題は藤為佳会媒などぞ聞えし。又関白殿にては、月の末学問料の試侍りて、松台暁調琴といえることを題にて、聞の字をもて韻には定められき。今年は春より雨のうるひ心もとなく、苗代にせき入る水さへかれ〴〵にて、蛙の声もまどをになり行まゝに、夏になりては早苗とる田子どもの、すべなくまどひて、まめやかに侘つゝ、五月はさりともと、せめて待るゝ五月雨さへ、なをつれなかりければ、子規の声も頼みがたく、公にも民の歎きを御心ぐるしうおぼしやらせ給ひ、雨の祈つかふまつらせ給はんとて、しるしある大徳達召れて、最勝講行はれたりしに、

第二日の夕、座の講師は澄憲僧都なり。いみじきざえにて聞えあぐる言の葉もゆへ〴〵しう、聞人々の涙もとゞめがたく、なべての袖どもうるひ渡りて、尊とくたのもしう、雨降べきよしの表白めでたうつかふまつりて、高座より下るまゝに、おどろ〴〵しうそゝぎ出たる物か。人々浅ましきまでに覚ゆるに、よの中よろこびのゝしる声さへ、うちあはせてどよみたり。公にもいみじき事に思し召れて、表白をば奉るべう仰言あり。講師はすなはち大僧都になさせ給へり。このゝち僧都によろこび聞ゆるとて、俊恵法師、

雲の上にひゞくをきけば君が名の
　雨と降ぬる音にぞ有ける

相撲の節は、年々聞し召なるを、いつの比よりか絶々にて、近きよには音もなかりしに、今年あるべしとて、文月はじめ召仰あり。此ほど小松の大納言右大将に成給えり。よろこび聞えにありき給ふとても、上達部殿上人あまた扈従し給ふるは、めづらしきまでなり。相撲は廿七日とぞ。上わかふおはしませば、いみじきことに興ぜさ

せ給ふ。左大将は師長の大納言よ。いと時のいうそくにて、人がらもやむごとなきに、右大将立ならび給ひ、更に劣りげなく、ようひもてなしなどは、まさゞまにさへ見え給ひぬ。つかさのすけたち、かた〴〵になみさぶらひ給ひ、楽所の物の音いみじきに、いかめしき最手など、国々よりのぼりければ、左右たちわかれて、勝負をいどみのゝしりたるほど、夕顔も葵の花も、何れか色のうせんやはと覚えて、こよなき見物也しかし。月の比になりては、何れの御前も御遊びなど、このましうせさせ給ふ。ことに晴たりける夜、うへ中宮の御方に渡らせ給ふ。御笛ふかせ給へるが、いとおもしろきを、人々めでたう聞えけるに、右京の大夫の君とりわけめで奉るとて、宮、かたくなしきほどなりとわらはせ給ひ、上にも申させ給へば、そはそら言など仰らるゝを聞て、右京の大夫、

さもこそは数ならぬ(ママ)一すじに
こゝろをさへもなきになすかな

とひとりごつを、大納言の君とてさぶらひ給ふ上臈きゝ付て、御前に啓し給えば、上いたう笑はせ給ひ、御扇にかきつけさせ給ふ。

笛竹のうきねをこそは思ひしれ
人の心をなきにやはなす

上はこと物よりも、笛をのみなん、いみじきものにせさせ給ひ、御心入れさせ給へば、常にめでたき音に吹せ給ふ。実定の大納言内に参り給ひける折、万歳楽をいとおもしろう吹すましておはしましける。大納言は、上の御笛はじめて聞奉り給ふに、いたう驚かれ給ひけるが、まかで給ひて、又の日、内の女房の中に申給ふ。

笛のねの万代までと聞えしを
山もこたふる心地せしかな

これは此年の事には侍らず、治承の比にもや侍らん。あやしう打まぎれて、おぼ〴〵しきこそかひなけれ。上は又歌をもこのませ給ひ、折ふしによませ給えるもおほく侍り。秋の末紅葉霧に透といえるを題にて詠ぜさせ給ふとて、

薄霧の立まふ山のもみぢばゝ

さやかならねどそれと見えけり

院も此道に御こゝろよせさせ給ひける。月紅葉をてらすといふ事を、殿上の人々につかふまつらせ給ふとて、御みづからもよませ給ふ。

紅葉ゝに月の光りをさしそへて
是やあか地のにしきなるらん

〔付記〕本書の翻刻を許可して下さった神宮文庫に厚く御礼申し上げます。

なお、本稿は平成二十八年度科学研究費補助金（若手研究B・課題番号16K16757）による成果の一部である。

（くもおか　あずさ・北海道教育大学講師）